

# 第三章 口承文芸

## 第一節 昔話と伝説

### はじめに

「口承文芸」とは、「口頭伝承」とも「口頭文学」ともいわれ、文字で書かれたものではなく、口頭で人から人へ伝えられてきた文芸のことで、本章では第一節で昔話と伝説、第二節で方言、第三節で歌を取り上げる。これらはすでに市域で途絶えてしまったものが多く、結果的に文字による記録から抽出することとなった。

口伝あるいは、口伝えという口頭による伝承には、地域独自のもの、または他地域と共有するもの、あるいは他地域から伝えられたと考えられるものなど、さまざまである。

昔話は、「むかしむかし」という確かではない時や「あるところ」という不明な場所を発端句として用いる。本当にあつたかどうかは知らないけれどという心持ちで語り継がれる話で、「お爺さんとお婆さんが」のように一般名詞で語られるのである。そして、大事な所へくと「だったとき」などの言葉で「自分は知らないけれど、そういうわれている」と断りを言い、最後にくると結句という「どつとはらい」とか「いちご栄えた」など、決まった言葉をいつて終わるのである。絵本などで目にする花咲爺・桃太郎・舌切雀・猿蟹合戦・かちかち山などがよく知られている。

これに対して伝説は、特定の時期、特定の人物、特定の場所で起きたと言われている昔から伝わってきた「話」のことである。ただし、伝説の中にも超常現象的な信じがたいようなものがあるのも事実で、

この点において、より「信憑性を重んじる」ものを「史話」と呼んでいる。史話はより客観的な事実や歴史的な事件の背景を説明するのに対し、伝説は特定の場所や人物、自然現象の由来を「本当にあつたこと」として信憑性を重視して語り継ぐものである。

本来、地域を限定しないはずの昔話も、○○県や○○地域に伝わる話として伝えられてきたものが多い。一方、地域の特定がなされる伝説にしても、その内容・主題・構造、または登場する人物や設定が類似している別の話が地理的・文化的に離れた地域や異なる時代に伝わり、形を変えながら類似した形で語り継がれている場合があり、これは「類話」と呼ばれている。富士宮市域の昔話・伝説は多分にこの要素が濃いものであると考えられる。

### 「口承文芸」とついで「昔話と伝説」

ここでいう「昔話と伝説」というのは、文芸的な作品を含むものではなく、あくまで口承の物語であることを前提にしている。ところが、近頃はその昔話や伝説を語ってくれる人に出会わなくなっている。市内の地域に向いて、昔話や伝説を掘り起こそうとしても、直接、祖父母や地域の古老に聞いたという人に巡り合わなくなってしまった。ときにそれを語ってくれる人がいても、二次資料としての文献から得た情報の受け売りに過ぎないといった状況である。昔話や伝説は生きてきた風土を離れ、文字や映像を通してしか出会えなくなってきた

## 富士宮の昔話と伝説の分布

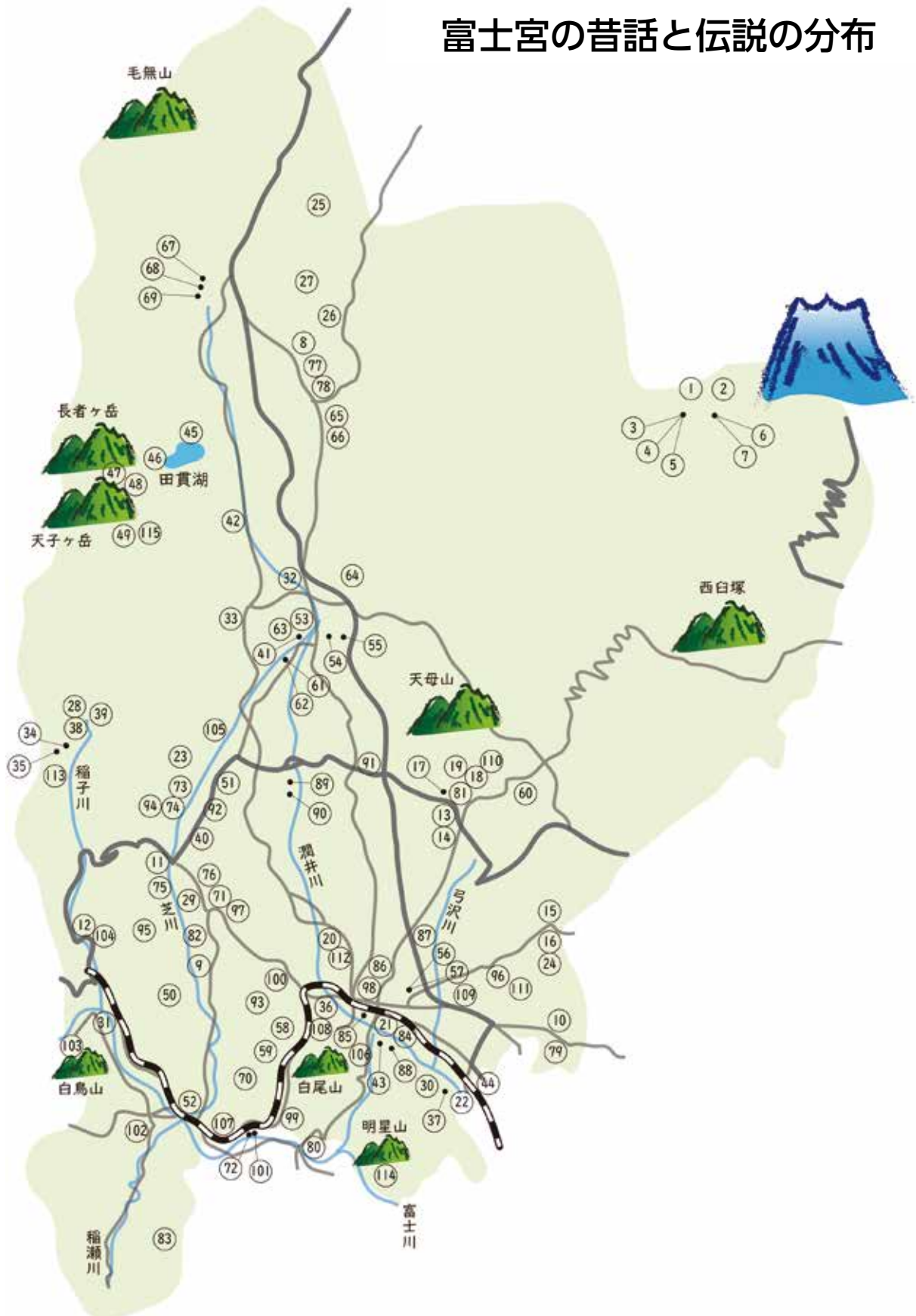


図 3-1 ① 富士宮の昔話と伝説の分布

『富士宮の昔話と伝説（新訂版）』に収載の115話の分布。

○数字は表 3-1 の No. と対応。



図 3-1 ② 富士宮の昔話と伝説の分布

『富士宮の昔話と伝説（新訂版）』と各文献に重複するものを除く 33 話。○数字は表 3-1 の No. と対応。

No.	富士宮の昔話と伝説	分類	No.	富士宮の昔話と伝説	分類	No.	富士宮の昔話と伝説	分類
1	駿河富士と下田富士	A	51	ほうなぜ小僧	F	101	先山観音	B
2	琵琶湖と富士山	A	52	酒を買いに来た山男	F	102	どんど焼きと白坊主	F
3	富士山と愛鷹山の背比べ	A	53	曾我兄弟の仇討ち	C	103	どんど焼きと白い鳥	F
4	富士山と八ヶ岳の背比べ	A	54	曾我八幡宮	C	104	池之谷	F
5	富士山と白山の背比べ	A	55	曾我兄弟の霊地	C	105	おいの窪	F
6	聖徳太子の富士登山	A	56	矢立池	C	106	尾無	E
7	役行者の富士登山	A	57	二つ石	C	107	楠金	F
8	朝茶	F	58	鞍掛石	C	108	甲石	F
9	森山の大蛇	E	59	頼朝の腰掛石	C	109	飛石	F
10	狸寺の話	E	60	硯石	C	110	女男石	F
11	柚野の狸和尚	E	61	狩宿の下馬桜	C	111	むじな塚	E
12	むじな和尚	E	62	幕張の樺	C	112	工藤谷戸	C
13	三匹の狐	E	63	お鬢水	C	113	枇杷窪・平家窪・自害沢・上臈ヶ淵	F
14	深い水	E	64	駒立の丘	C	114	明星山と星山	F
15	狐のお礼	E	65	大將的場と的山	C	115	蛇バミ	E
16	馬方と狐	E	66	穴籠とあま池	C	116	オヤスミサン	B
17	お日待ちの買い物	E	67	撫川	C	117	楠金の八幡様	B
18	魚売り	E	68	太鼓石	C	118	輪くぐりさんの大銀杏	B
19	肥溜の風呂	E	69	畠山重忠の駒止の桜	C	119	やみ田	F
20	底なしの池	F	70	逆さ柳	C	120	村界の決定	F
21	竜神の宮参り	F	71	逆さ杉	C	121	芭蕉天神	B
22	立願淵の竜神	F	72	古田の観音さん	C	122	御大事松の由来	B
23	清十郎と鬼婆	F	73	瀬古	C	123	喧嘩淵と立谷稻荷大明神	B
24	杉田の山姥	F	74	かりんど橋	C	124	鉾立石	B
25	商人と山犬	E	75	櫃石と甲石	C	125	いびやー沢	F
26	むるがこわい	E	76	今井の沢と猫石	C	126	犬梯子	E
27	狼	E	77	人穴の探検	C	127	森蘭丸の末弟	F
28	天狗の寝床	F	78	大まっさあと小まっさあ	F	128	矢で郷境を定める	F
29	檜木淵の川天狗	F	79	子安神社の話	B	129	富士の人穴	C
30	河童の詫び証文	F	80	沼の子安さん	B	130	音止めの滝	C
31	橋上の河童	F	81	山宮浅間神社の本殿	B	131	神田の市	F
32	おめん淵	F	82	お伊勢参り	B	132	俎板橋	C
33	おべん淵	F	83	山猫と窪山の天神	B	133	鉄砲曼荼羅	B
34	みょうそ淵	F	84	産ノ御前の松	B	134	紅葉天神	B
35	みょうそ淵の主	F	85	衣掛松	B	135	鬼の岩屋	F
36	坊ヶ淵	F	86	神姫松(姫神松)	B	136	待ち橋	F
37	安が淵	F	87	舞々木	B	137	曾我兄弟と王藤内	C
38	丸淵	F	88	本光寺の銀杏	B	138	摩利支天塚	B
39	牛淵	F	89	大蛇窪	B	139	伊之吉の彫刻	F
40	赤子淵	F	90	説法石	B	140	養蚕御前	F
41	ねんねん淵	F	91	日尊の腰掛石	B	141	霊跡カナトヅル	B
42	鬼のいない村	F	92	身代わり日朝さん	B	142	爪引きの曼荼羅	B
43	「鬼は外」をいわない豆まき	F	93	極楽寺のお祖師さん	B	143	精進川の柏の木	B
44	吉野長者の娘	D	94	首無し地藏	B	144	題目杉	B
45	炭焼き藤次郎	D	95	大畑の庚申さん	B	145	姥穴・婆々穴	F
46	炭焼き長次郎	D	96	出水の地藏さん	B	146	播鉢三つ	F
47	ヨウラクツツジ	D	97	蛙石(羽鮒)	B	147	法事は何時かや	F
48	炭焼き松五郎	D	98	蛙石(西町)	B	148	コノハナサクヤ姫	B
49	尹良親王と延菊	D	99	疣神さん	B			
50	金沢長者	D	100	疣石	B			

表 3-1 富士宮の昔話と伝説一覧

1 ~ 115 は『富士宮の昔話と伝説(新訂版)』に記載、116 ~ 148 は各文献に重複するものを除く 33 話。

—分類の凡例— A…富士山に関わる伝承 B…信仰に関わる伝承 C…富士の巻狩りに関わる伝承  
D…長者に関わる伝承 E…動物に関わる伝承 F…その他に関わる伝承

いる。本来、「昔話と伝説」といった「口承文芸」は会話表現の多用、情景や心理描写の詳細化など、子どものための物語としてはぐくまれてきたものである。ここまで語り継がれてきた口承による文化の連鎖は、断絶の危機にさらされて久しくなっている。

そうした中、昭和六一年（一九八六）から、富士宮市地域女性連絡会（以下、市女連）により、市内に伝わる「昔話と伝説」を紙芝居に仕立て上げ、広く市民に伝えようとする取り組みが始まった。昭和六一年の「曾我兄弟の仇討ち」「吉野長者の娘」を皮切りに、紙芝居として市女連研修部の人たちが市にとって貴重な「昔話と伝説」を直接市民に語ってくれるようになったのである。この取り組みは現在まで続けられ、令和六年度（二〇二四）までに四〇作もの紙芝居が完成している。市女連のこうした取り組みは、郷土史研究家の渡井正二氏による指導により成し得たものである。

### 渡井正二氏の研究成果

富士宮市の「昔話と伝説」を民俗学的に調査・研究し、口承文芸として広く市民に発表してきた渡井正二氏が、長年にわたる調査・研究の成果として平成二四年（二〇一二）に刊行した『富士宮の昔話と伝説（新訂版）』には、総数二一五の昔話・伝説が収載されている（図3-1-①、表3-1-1の1～115）。

『富士宮の昔話と伝説（新訂版）』は、平成二二年（二〇一〇）に富士宮市と芝川町が合併した後の現市域を対象としたものであるが、合併以前の富士宮市域を対象にした『富士宮の昔話と伝説』『富士宮の昔話と伝説（改訂版）』を基にしており、氏にとって集大成といえるものである。この中で氏は、自分にとつての「昔話と伝説」の原点は、幼いころ祖母（明治二二年生、杉田）の語ってくれる話で、祖母が明治二二年（一八八九）に、東海道線を走る汽車を杉田から初めて見た

ときの驚きや、その汽車に乗りたくて娘時代に草薙（静岡市清水区）まで茶摘みに行ったこと、製糸の女工が明治時代のあこがれの仕事だったことなど、明治の世事についても話してくれたという。それを聞くのは夜毎の楽しみ、心の励みであり、それらの話を出発点に、昔話・伝説の採話を始めたのは、昭和二九年（一九五四）からのことであるとつづっている。

正二氏は、この『富士宮の昔話と伝説（新訂版）』発刊以前にも、「ふじのみやの昔話」や富士山文化塾叢書第四集『富士宮の昔話と伝説』などの発刊を通して、広く市民に「昔話と伝説」を発表してきた。

こうした文献を通して氏は、昔話と伝説の違いを示しながら富士宮市においてはどれが昔話で、どれが伝説かなどとこだわらなくともも言っている。それは、『富士宮の昔話と伝説（新訂版）』に掲載されている一一五の昔話・伝説を見ても明らかで、「昔々、ある所に、〇〇と〇〇がおりました。」と明確に語り出す昔話の形式を取るものは「朝茶」と言う話だけである。「昔々、ある所に」と言うよりも、「昔、〇〇がいてな。〇〇の町に」と実際の名前や地名を言う方が話しやすいし、聞き手にとつても分かりやすく親しみが生まれるようにと、主人公に固有名詞をつけて話すようにもなる。こうして現在の富士宮市では、昔話も伝説的に語られる傾向が多くなつてきていると指摘する。話型の形式だけでは昔話か伝説かは俄には決めることができないが、現在まで富士宮市に伝わるという話は伝説の話型をもつ形式に属するものが多数を占める様である。

## 富士宮市に残る「昔話と伝説」

富士宮市に現在まで残る「昔話と伝説」はいくつあるであろうか。渡井正二氏の『富士宮の昔話と伝説（新訂版）』には一一五話が収録されているが、正二氏の著作物発刊以前にも市域における「昔話と伝説」の採話集が刊行されている。これらを時代順に整理して、収録されている話を表3-12に並べてみる。

地域史研究書として、再話集としての位置づけを持つ一六の文献に一六〇余りの「昔話と伝説」の収録がみられるが、前章の『富士宮の昔話と伝説（新訂版）』に収録のもの、各文献に重複するものを除くと三三話が残る（図3-1②、表3-1の116～148）。したがって、『富士宮の昔話と伝説（新訂版）』一一五話と合わせた一四八話が現在まで残る口承文芸としての「昔話と伝説」ということになる。

これ以外にも、市内各区誌などにも記載がみられるが、おおむね上記の文献に取り上げられているものである。なお、これら文献に収録されているものの中には、「伝説」と「史話」の境界が曖昧なものも含まれることを明らかにしておく。

なお、令和三年（二〇二一）から市内全域を対象に実施した「富士宮市石造物悉皆調査」において伝承・史実が刻まれた記念碑や由来碑などの存在も明らかになっている。

この石造物悉皆調査は、富士宮市全域を対象に四年余を費やした、いわゆる路傍の石造物を対象にしたもので、現在整理中である。数千件に及ぶ調査対象物の中で、伝承・史実などが刻まれた記念碑や由来碑は二百数十基に上るものと思われるが、個人的なものや墓碑銘と思しきものを除いたものを表3-13に示す。

	刊行年	書名	著者・出版	昔話と伝説
1	昭和九年	『静岡県伝説昔話集』	(静岡女子師範学校郷土史研究会編)	「山男」、「西山の森山」、「オヤスミサン」、「楠金の八幡様」、「先山観音」、「輪くぐりさんの大銀杏」、「工藤塚」、「やみ田」、「鉾立石」、「蛙石」、「金沢長者」、「オインクボ」、「楠金」、「どんど焼と白坊主」、「いびやー沢」、「白鳥山」、「さかさ柳」、「お産の松（産の御前の松）」、「衣掛の松」、「本光寺の銀杏」、「杉田のむじな塚」、「安養寺の狸・化け和尚」、「犬梯子」、「森蘭丸の末弟」、「矢で郷境を定める」、「富士の人穴」、「鬼橋」、「長者池の大蛇」、「天子ヶ岳の躑躅」
		復刻版 平成六年 『新版 静岡伝説昔話集 上・下巻』	羽衣出版（宮本勉校訂）	
	昭和十八年	『駿河の伝説』	小山有言著 安川書店	
		復刻版 平成六年 『新版 駿河の伝説』	羽衣出版（宮本勉校訂）	
2	昭和二七年	『伝説富士物語』	小長谷宗芳著 創作新報社	「富士山の誕生」・「背競べの富士山」・「天子が岳のつつじ」・「長者が池」・「富士の巻狩り」・「音止めの滝」・「人穴の探検」・「柏談義」・「大石寺の説法石」・「狸寺の怪」・「鬼橋」
3	昭和二八年	『白糸をめぐる郷土研究』	渡辺兵定著 渡辺兵定翁遺稿刊行会編 白糸村議会	「吉野長者娘手巻入水の事」、「炭焼松五郎の譚」、「炭焼長次郎（弾南長者）」、「節分に豆撒かぬ村（鬼橋の由来）」
4	昭和三三年	『史話と伝説 富士山麓の巻』	松尾四郎著 松尾書店	「狸寺」、「大蛇退治」、「森山」、「夢合せ上行寺」、「龍神の参拝」、「舞々木」、「神田の市」、「極楽寺堂」、「工藤塚」、「炬板橋」、「鉄砲曼荼羅」、「紅葉天神」、「曾我兄弟」、「お弁の淵」、「天子ヶ岳ヨーラクツツジ」、「鬼の岩屋」、「待ち橋」、「炭焼長者」、「富士山開山の伝説」、「富士登山の伝承」

	刊行年	書名	著者・出版	昔話と伝説
5	昭和三八年	『人穴と家康 富士山西麓の伝説』	遠藤秀男著 国際開発株式会社	「富士の人穴（家康と角行ほか）」「長者ヶ池（田貫湖）」、「天子ヶ岳とヨウラクつつじ」、足形の鬼橋、「富士の巻狩り」、曾我兄弟の仇討ち、「富士登山（略）史」
6	昭和四〇年	『富士山をめぐる郷土の歴史』	遠藤秀男著 富士宮市立 上井出中学校	「人穴探検始末記」「富士の巻狩り」、「富士山縁起」、「富士登山の歴史」、「富士の人穴草子」、「天子ヶ岳と長者ヶ池」、「人穴と家康」、「曾我八幡宮」
7	昭和四三年	『富士宮歴史散歩』	遠藤秀男著 緑星社	「神田市」、「太鼓石」、「曾我兄弟と王藤内」、「おびん水」、「杉田の子安さん」、「摩利支天塚」、「もみじ天神」、「狸のかきもの」、「日尊と腰掛石」、「沼の子安さん」、「富士の巻狩り伝承」、「大石寺と説法石」、「平家の落人伝説」
8	昭和四五年	『星山の伝説と歴史』	深沢洋著 富士宮市星山区	「明星山、星山の名の由来」、「王藤内の墓」
9	昭和四八年	『芝川町誌』	芝川町誌編さん委員会編 芝川町	「天子ヶ岳」、「池の谷」、「弓箭で村境を決める」、「山男の話」、「楠金の八幡さん」、「いびやー沢」、「楠金」、「伊之吉の彫刻」、「ドンドン焼と白坊主」、「白鳥山とドンドン焼」、「さかさ柳」、「養蚕御前」、「古田の観音様」、「森山」、「日朝さん」、「今井の沢と猫石」、「赤子淵」、「蛇石」、「ほうなぜ小僧」、「芝瀬川の天狗の話」、「さかさ杉さん」、「かりんど橋」、「首無し地蔵」、「櫃石・甲石」
10	昭和四八年	『大石寺をめぐる史蹟と伝説』	富士宗四郎著 緑星社	「霊跡カナトヅル」、「霊石説法石」、「大蛇窟の怪」、「日尊の腰掛石」、「出乳を祈る銀杏」、「爪引きの曼荼羅」、「精進川の柏の木」、「題目杉」、「夢合せ上行寺」、「極楽寺の祖師像」
11	昭和五〇年	『富士宮むかし語り』	遠藤秀男著 緑星社	「曾我伝説のあらまし」
12	昭和五一年	『志ば川の歴史 史実と歴史』	齊藤静夫・王子坂保彦・ 唐紙一修著 芝川郷土史 研究会	「河合入道と日興爪引きの曼荼羅」、「天子ヶ岳と南北朝」、「白鳥山」、「村界の決定」、「ほうなぜ小僧」、「芭蕉天神」、「宇佐美大和」、「榎木淵の天狗」、「上柚野首なし地蔵さん」、「御大事松の由来」、「喧嘩淵と立谷稲荷大明神」、「山男の話」、「いびやー沢」、「森山」、「天子ヶ岳と狸沼」、「天子ヶ岳と源頼朝」
13	昭和五八年	『富士山の洞穴探検 怪奇と伝説』	遠藤秀男著 緑星社	「姥穴・姥捨穴」
14	昭和六〇年	『芝川歴史散歩 無限嶺』	王子坂保彦著 緑星社	「天狗の寝床」、「橋上の河童」、「播鉢三つ」、「法事は何時かや」、「清太郎と鬼婆」、「落合の雨乞い」
15	昭和六一年	『碑文の人を訪ねて』	佐野十三郎著 緑星社	「矢立池の由来」
16	平成八年	『富士山歴史散歩』	遠藤秀男著 羽衣出版	「テングの山造り」、「下田富士と駿河富士」、「山の背くらべ」、「筑波山と富士神」、「コノハナサクヤ姫」、「伝説の登山者（聖徳太子・役行者）」、「仁田四郎の人穴探検」、「富士の巻狩り」、「曾我兄弟の仇討ち」、「頼朝と巻狩り伝承」、「人穴と家康」、「行者角行の話」、「弾南長者と長者ヶ池」

表 3-2 富士宮の昔話と伝説一覧

No.	名 称	地区名
1	摩利支天塚の由来	大中里
2	芙蓉館碑	宮 町
3	曾我八幡宮由来	猪之頭
4	北山天満宮の変遷	北 山
5	衣掛松碑	西 町
6	角田桜岳碑	東 町
7	佐次郎堤	大中里
8	山宮用水	山 宮
9	紅葉天神	山 宮
10	三極栽培記念碑	原
11	木川家と文殊菩薩	原
12	宇佐美大和守	猫 沢
13	本門寺用水の事	北 山
14	富士見石	宮 町
15	久我大納言石のいわれ	内 房
16	芭蕉天神由緒	内 房
17	曾我八幡宮由来	上井出
18	曾我兄弟の霊地	上井出
19	帰還戦車の由来 (若獅子神社)	上井出

表 3-3 石造物に刻まれた主な伝承・史実

## 富士宮市の「昔話と伝説」の分類

富士宮市に残る「昔話と伝説」は六つに分類できる。各々の話の分類は表3-1に記載するが主なものを次にあげる。

### A 富士山に関する伝承

「富士山の誕生」に関する伝承…「駿河富士と下田富士」など  
「山の背比べ」に関する伝承…「富士山と八ヶ岳の背比べ」など  
「伝説の富士登山」に関する伝承…「聖徳太子の富士登山」など

### B 信仰に関する伝承

「浅間神社」に関する伝承…「竜神の浅間神社詣で」など  
「コノハナサクヤヒメ」にかかわる伝承…「産ノ御前の松」など  
「日蓮とその弟子日興」に関する伝承…「本光寺の銀杏」など  
「その他神仏」に関する伝承…「子安神社の話」など

### C 富士の巻狩りに関わる伝承

「狩宿とその周辺」に関する伝承…「幕張の樺」など  
「陣馬の滝とその周辺」に関する伝承…「撫川」など  
「その他の市域」に関する伝承…「矢立池」など  
「曾我兄弟の仇討ちとそれに関する伝承…「音止めの滝」など  
「人穴の探検」に関する伝承…「富士の人穴」

### D 長者伝説

「炭焼き長者」に関する伝承…「炭焼き藤次郎」など  
「その他長者」に関する伝承…「吉野長者」など

### E 動物に関する話

「狸」に関する伝承…「狸寺」など  
「狐」に関する伝承…「馬方と狐」など  
「山犬」に関する伝承…「商人と山犬」など

### F その他の話

「鬼」に関する伝承…「鬼のいない村」  
「淵」に関する伝承…「おめん淵」など  
「河童」に関する伝承…「橋上の河童」など  
「瓔珞躑躅」に関する伝承…「尹良親王と延菊」など  
「その他伝説の石」に関する伝承…「富士見石」など

一つ一つの話を読んでもみると、富士宮市に伝わる「昔話と伝説」は、どちらかといえば、「昔、万野原あたりに三匹の狐がいてな。通る人に悪さをしていた」というように、聞き手にとっても具体的で分かりやすく、また、親しみがもてるように、主人公に固有名詞をつけ

て語られているのである。「昔話」の定義としてそのすべてが「昔々、あるところに、誰々が」ではなく、特定の地域、名前で始まるものが多く存在するのである。また、本市においては「昔話と伝説」と同様に親しまれて伝承されてきた「史話」も長い年月の中で「昔話と伝説」の様に語られていることに気づくのである。

### 富士宮市に伝わる「昔話と伝説」の特徴

富士宮市にとって、特に地域性や歴史的人物をもって伝承されてきた話がいくつもある。富士宮市の「昔話と伝説」の特徴としていい、これらの話をまとめてみることにする。

#### ①富士山の誕生に関わる話

富士山周辺の市町村に共通の話であることは間違いないが、山頂の所有権が認められている富士山本宮浅間大社を擁する町として語られてきたものである。

#### 「駿河富士と下田富士」

昔々のずっと昔、日本の国がすっかりでき上がる前のこと、あっちこちで山や湖ができていたころのことです。伊豆の下田富士と駿河富士は、それはそれは仲の良い姉妹でした。

二つの山は、小さいときから互いに声を掛け合い親しみ合ってきました。特に、下田富士は姉さんだったので、何くれとなく気を遣い、雨が降りそうになると妹の駿河富士に笠雲かけてやったり、風が強いときには長い雲の手を延ばしてやったりしました。ところが、姉さんの下田富士は姿が醜く、それにひきかえ、妹の駿河富士は大変美しい姿

をしていました。ですから、駿河富士は人々から誉めそやされるのに、一方の下田富士の方は、人々から見向きもされませんでした。

そればかりか、「妹の美しさに比べて、なんて醜いのだろう。」などと、かげ口がささやかれました。

このことを知った下田富士は、大変悲しみ、「私は、もうだれにも見られたくない。妹とも、顔を合わせたくない」とふさぎ込んでしまいました。そして、ある晩のこと、妹の駿河富士との間に天城山あまぎさんという高い山を屏風びょうぶのように立ててしまい、その高い山の陰に隠れてしまいました。

駿河富士は、幼いときから仲良くしてきた姉さんが、山の陰に隠れてしまったので、大変驚き、

「お姉さまあ。下田のお姉さまあ、どうなさったの。」

と、一生懸命に呼び掛けました。そして、なんとかなつかしいお姉さんの姿を見たいものと、精一杯背伸びをしました。しかし、妹の声が聞こえてくると、姉さんの下田富士はますます屏風の山を高くして、姿を見せなくしてしまいました。下田富士が山の陰に隠れば隠れるほど、駿河富士の姉さんを思う心はつのもり、ますます背を伸ばしては姉さん呼びました。

こうして、駿河富士はどんどん高くなり、今のようになり、びえ立つ高い山となりました。

駿河富士（富士山）は標高三七七六m、下田富士は標高一八七m、その中間にある標高一四〇六mの天城山という地理的環境を富士山の誕生に結び付けた話であるが、もともとの伝承地は下田であろう。日本最高峰富士山への畏敬とともに強烈な対抗意識を持ち合わせてい

る話である。こうした意識は「山の背比べ」として、「愛鷹山と富士山」「八ヶ岳と富士山」「筑波山と富士山」「白山と富士山」など各地に広がる話である。

## ②富士の巻狩りと曾我兄弟の仇討ちに関わる話

### 〜曾我兄弟の仇討ち(伝説)〜

白糸滝の近くには、曾我の隠れ岩や曾我兄弟の墓・曾我八幡宮など、曾我と名のつくものがいろいろ残されています。この近くで、建久四年五月二十八日に曾我兄弟が父の仇工藤祐経を討ちました。それは、源頼朝が巻狩りを開いた時のことです。

曾我兄弟の父河津三郎祐泰は、兄弟がまだ幼いころ工藤祐経に殺されてしまいました。工藤祐経は、領地争いから兄弟のおじいさん伊東祐親をねらって矢を射かけました。ところが、矢は一緒にいた兄弟の父河津三郎祐泰に当たってしまいました。父を失った幼い兄弟は、母とともに曾我の家に引き取られていきました。

曾我の里で成長した兄弟は、元服して兄は曾我十郎祐成と、弟は曾我五郎時致と名乗りました。立派な若武者となった兄弟は、父の仇工藤祐経を討つ機会を伺っていました。すると、源頼朝が富士山の麓で巻狩りを開くことになり、工藤祐経も加わることになりました。とうとう仇討ちの機会が巡ってきたと、兄弟は勇んで富士山の麓の狩場へ向かいました。

狩場に着いた兄弟は、毎日勢子に交じって祐経を狙っていましたが、なかなか機会がありませんでした。建久四年五月二十八日、この日は雨のため狩りが早くやめになりました。

降りしきる雨に武士たちは退屈してしまい、早くから酒を飲み始めました。兄弟は、これはよい機会だと身仕度を整えて、夜になるのを待ちました。

暗くなると、兄弟は祐経の仮屋の近くの岩陰に身をひそめ、討ち入りの相談を始めました。ひそひそと話す兄弟の耳に、滝の轟音が響いて声さえぎられてしまいます。

兄弟が、ふと「心無しの滝だなあ」とため息をつくと、不思議にも激しい滝の音がびたりと止み、無事相談ができました。兄弟の相談がすむと、再び滝の轟音が辺りに響きわたりました。

やがて夜が更けると、仮屋の武士たちは酒の酔いと連日の狩りの疲れで、ぐっすり寝込んでしまいました。雨の中を仮屋に忍び寄った兄弟は、小さな松明を片手に仮屋の中に踏み込みました。死んだように眠っている武士の間を、親の仇工藤祐経を探し回りました。

祐経は、一段高い所に王藤内と寝ていました。兄弟は、「眠り込んでいるのを討つのは残念だ、目を覚まさせてから討とう」と、ぐっすり寝込んでいる祐経の枕を蹴飛ばしました。驚いて起き上がった祐経に、

「河津三郎祐泰が子、曾我十郎祐成」

「同じく、曾我五郎時致」

「父の仇討ちのために討ち入ったり、十八年に及ぶ修練のやいは受けてみよ」

と、仇討ちの名乗りを上げると同時に、兄弟が力を合わせて切り付けました。祐経は急いで刀を取って立ち向かいましたが、兄弟の鋭い太刀先に切り倒されてしまいました。この太刀音に驚き、起き上がった王藤内も兄弟の刃に討たれてし

まいりました。こうして、兄弟は無事親の仇工藤祐経を討ち果たすことができました。

この騒ぎに、驚いた遊女たちが悲鳴を上げたので、兄弟はたちまち集まって来た武士たちに取り囲まれて、激しい切り合いが始まりました。兄弟の必死の刃に、傷つく者、切られて死ぬ者もありましたが、兄弟を取り巻く武士の数は、だんだん増えてきました。ついに兄の十郎祐成は、新田四郎忠常に討たれてしまいました。弟の五郎時致は、頼朝の館に向かつて突き進みましたが、途中で女の着物を被って変装していた五郎丸に後から組みつかれてしまい、とうとう取り押さえられてしまいました。

次の朝、頼朝の前に引き出された五郎丸は、小さい時からの苦心や、仇討ちのわけを詳しくのべ、最後に「今はただ、死を給え。」と願いました。これを聞いた頼朝は、兄弟の健気な心に感動し、五郎を許そうと思いました。しかし、祐経の子犬房丸が泣きながら、

「父の仇、五郎時致の身柄を頂戴したい。」

と願ったので、頼朝はやむなく五郎丸を犬房丸に渡してやりました。犬房丸に引き渡された五郎時致は、打ち首にされてしまいました。

曾我兄弟が討ち入りの相談をしたとき、響きを止めたという滝は「音止の滝」といわれて、今でも白糸滝の東側で轟音を響かせています。また、この滝のすぐ東に、兄弟が身をひそめたといわれる「曾我の隠れ岩」と、工藤祐経の墓といわれる塚があります。少し離れた所に、曾我八幡宮があり、そこで兄の十郎祐成が討たれ、弟の五郎時致も処刑されたといわれ、神社のすぐ東側に兄弟の墓があります。

富士の巻狩りは、建久四年（一一九三）五月から六月にかけて、源頼朝が多くの御家人を集め富士山麓の藍沢（御殿場市・裾野市一帯）・富士野（富士宮市）で行った壮大な巻狩りのことである。『吾妻鏡』建久四年五月八日条にも記述がある歴史的事実なのであるが、その間に起こった「曾我兄弟の仇討」という事件の発生をもって多くの伝承を生んだものである。

この伝説は、『吾妻鏡』や『曾我物語』などかなり近い部分をもった話である。曾我兄弟の仇討ちについては、吾妻鏡の記録や鎌倉時代末期に成立したといわれる『曾我物語』を基にいくつもの『曾我物語』が作られてきた。室町時代から戦国時代にかけては、日蓮宗の僧侶らによって『曾我物語』が書かれ、市内の北山本門寺や大石寺に真名本や訓読本として『曾我物語』が残されている。この物語が発展してきた裏には、仏を忘れ功利に走る人心を捉え、教化していく材料として曾我兄弟の道義的行動が有効であったからではないかと考えられている。

一方、時の権力者である源頼朝が挙行した「富士の巻狩り」に関する伝承は二〇を越えるなど、富士宮市にとって最も親しみをもって伝わってきた伝承といえるものである。

### ③日蓮とその弟子日興に関わる伝説

#### く本光寺の銀杏く

黒田の本光寺には、大きな銀杏の木がありました。今は枯れてしまいました。その跡には、今も銀杏の木が植えられています。

昔、文永十一年の夏の初めのこと、遠藤左衛門夫婦が仕事の手を休めて田圃の畦に腰を下ろすと、近くの銀杏

の木の下で休んでいる旅のお坊さんがいました。左衛門夫婦は、お坊さんにお神酒と柏餅を持って行ってあげました。お坊さんは大変喜んで、柏餅を召し上がりました。お坊さんがお疲れの様子だったので、左衛門夫婦は、「どうぞ、今夜は家でお休みください。」とお勧めし、一晩お世話をすることになりました。

夜になって、おかみさんが年に似合わず赤ん坊を抱いていたので、お坊さんが訳を尋ねました。

「嫁に先立たれて、この子を育てるのにお乳がなくて困っています。」と、おかみさんが話しました。

するとお坊さんは、「それはお困りでしょう。私が、お乳が出るようにしてあげましょう」と話して、外へ出ると銀杏の葉を取ってきました。お坊さんは、お経を唱えながら銀杏の葉でおかみさんの乳房をなぞりました。すると、不思議にもおかみさんの乳房がふっくらとして、お乳が出るようになり、赤ん坊はすくすくと育ちました。

この時のお坊さんが、身延山久遠寺を開いた日蓮上人です。赤ん坊は、成人すると身延山に上がり、修行しこの地に帰り、銀杏の木の近くに寺を建てました。それが黒田の本光寺です。

それから後、本光寺の銀杏の実をいただいて、お粥に入れて食べると、お乳が出るようになると言われています。

佐渡に流されていた日蓮が、鎌倉を後にして甲斐国身延に向かった道すがら大宮に宿泊したといわれる。その宿泊地が黒田で、本光寺はその縁の地に建てられた寺だと言い伝えられてきた。日蓮関連の伝承はこの他、大泉寺などの各々の寺伝により残されている。

また、日蓮没後の後継者の一人であった日興の富士宮地域での布教活動に伴う数多くの伝承が残されていて、後に富士十五山と言われた各寺院と密接な関わりがある。

#### ④特異な伝承

##### 「鬼のいない村」

昔、富士山の麓に鬼が住んでおり、白糸の滝辺りの村々に出てきては悪さをしていました。ある日、治兵衛さんという猟師が夜遅く村に帰って来ると、村の入口の橋の所に鬼が立っていました。治兵衛さんが夢中で鉄砲の引き金を引くと、弾は鬼のお腹に当たりました。治兵衛さんは恐ろしくなって家に逃げ帰りました。一方、鬼は住処に帰る途中お寺によって、和尚を起こして薬をもらうことにしました。和尚は薬だといって火薬を鬼に渡し、傷口に詰めて温めるように教えて、火打ち石も持たせました。住処へ帰った鬼が和尚に教えられた通りにしたところ、鬼は爆発してばらばらになってしまいました。それから後、この地域では鬼がいないので節分に豆まきをしなくなったとさ。

追儺の儀式が庶民に広まったのが節分の豆まきだが、内野の足形ではこの話が基となって豆まきをやらない風習であるというのも面白い。足形に伝わる「鬼のいない村」は、節分を行わない地域という極めて珍しいあまり語られない話である。

## 第二節 失われゆく方言

方言は言語のうち共通語ではないそれぞれの土地の言葉で、音韻や語彙、文法やアクセントなどの要素全体を含んだものである。しかし、一般的には共通語・標準語ではない単語を指して方言と呼ぶことが多い。富士宮地域の方言の中にも、市全域で共通する方言、一部地域に限定される方言がある。ただし、だんだんと使われる方言は減り、現在は共通語が日常的に多用される傾向にある。今日のマスメディアの発達により、地域差は確実に平均化しつつあり、さらに方言の使用は少なくなると予測される。しかしながら、共通語に置き換えることができず、また、地域の暮しに欠かせない方言は今後も伝承されていくと考えられる。

富士宮地域の方言については、昭和四八年（一九七三）発行の『芝川町誌 第七編第四章第五節方言』、昭和五九年（一九八四）に発刊された『富士の地方ことば（方言集）』、平成二二年（二〇〇九）に発刊された『富士山麓の方言集』などでまとめられている状況であった。これらの方言を富士宮市郷土史同好会方言部会の面々が令和三年（二〇二一）から五年間にわたって、さらに詳細に調べ上げ、丹念に検討を重ねて作成したものが次ページ以降の「富士宮地域の主要な方言一覧」（表3-4）である。

富士宮市は旧富士郡と旧庵原郡いほらが混在し、西は静岡市清水区や山梨県、東と南は富士市、北は山梨県と接している。静岡県は全国からみると東西文化の接点あるいは分岐点と言われ、その中でも富士川によって分けられるものが多い。富士宮市は、富士川以西の言葉、山梨県の言葉、駿東・伊豆地域の言葉が入り混じっているとされてきた。

現在、富士川には大きな文化的側面の境界線がいくつも集中していることから、文化圏の境界域として大きな意味を持つものと認められ

るのである。

今回、富士宮市郷土史同好会方言部会では「富士宮地域の主要な方言一覧」をまとめるにあたって、当初、方言はそこに住む人々の生活の中から生まれた言葉であり、そこで生業なりわいを営む人々の言葉であるから、地域の中である程度共通しているとの認識に立って作業を始めた。しかし、作業を進める中で、必ずしもそうではないことがわかってきたのである。

それは、それぞれの家に暮らす人々が、同じ家で生まれ、同じ家で育ったというわけではなく、母は市内の〇〇から、祖母は〇〇県〇〇市から来た、というような具合に生まれ育った場所が違う人と共同生活を送るわけであるから、いろいろな地域の言葉が入り混じっていることがわかったのである。

そこで、影響力を強く持つ周辺地域でも使われている言葉は除いて、地域で主に使われていると考えられるものを絞り込んでまとめた。

本節では、富士宮市郷土史同好会方言部会がまとめた、現在までに地域に残されていると判断した方言を記録として残しておくことにする。

なお、昭和四八年（一九七三）刊行の『芝川町誌』に記載のある方言から、今回まとめられたものと重複しないもので芝川地区固有と考えられるものを追加した。

富士宮市域の主要な方言一覽 (五十音順)

No.	方言	意味
27	あればっか	思ったより少ない
26	あれつきし	あれから
25	ありんど	蟻
24	あらませ	あらかた／ほとんど
23	あらぼっちゃあ	荒々しい
22	あらすか	有りはしない
21	あまつちょ	女の子単語
20	あまげる	甘える
19	あばらう	競う
18	あとしざり	うしろざがり
17	あてぎやある	与える
16	あつらさる	頼まれる
15	あつばってやあ	熱っぽい
14	あつたらか	有ったかな
13	あたける	暴れる
12	あせばったやあ	汗染みている
11	あすけえらあ (あすこいら)	あの辺
10	あじなめる	付け込む
9	あこつ	かかと
8	あかんにやあ	開かない
7	あかささんない	開けられない
6	あおんどろ	青い藻
5	あいたんふう (こいたんふう)	あのよう(このよう)
4	あいさ	間／合間
3	ああぬく	仰向く／顎をあげる
2	ああさる	重ねる／合わせる
1	ああいやあこゆう	口答えする

No.	方言	意味
54	い(行)ってみる	出発する
53	いっしょくた	ごちゃ混ぜ
52	いっしょうまつしょう	一生涯
51	いちんちひがさら	一日中
50	いちら	くから
49	いただきました	ごちそうさまでした
48	いごく(いのく)	動く
47	いける	埋める
46	いくらあ	行くでしょう
45	いくすり	いびき
44	いきっこな	行かなかった
43	いかつてる	埋まつてる
42	िकासか	行こうか
41	いかさあ	行きましょう
40	いかい(いきやあ)	大きい
39	いいら	いいだろう
38	いいにする	やめにする
37	いいつぶし	喋り方
36	いちゃあほうきやあ	言いたい放題
35	いいこん	良い事
34	いいかん	かなり
33	いいからかん	いい加減／ずさん
32	あんましんない	余り多くない
31	あんまし	あまり
30	あんばらやむ	腹をこわす
29	あんななに	あのように
28	あんきやあ(あんかい)	あれだけ

No.	方言	意味
83	おくらぶち	いろいろのふち
82	おかさ	傘雲
81	おおまくらい	大めし食い
80	おおぼってやあ	おしい
79	おおほう	腫れぼったい／うっと
78	おえにやあ	無欲／やたらと
77	えんだ	終らない
76	えれもん	罎が入った
75	えみ	容器
74	えって	罎
73	ええきんぼう	選ぶ
72	ええかん	お人よし
71	うわつかあ	たくさん
70	うるしゃあ	上側
69	うらっぱ	うるさい
68	うらあ	先／先端
67	うみやあ	俺
66	うまかりそう	おいしい
65	うつつやる	うまさう
64	うそかつたりい	捨てる
63	うざつぶい	だるい
62	いわく	きたならしい
61	いらんこん	結ぶ
60	いもっこじ	余計なこと
59	いぶせったい	芋の子
58	いのける	けむい
57	いなたな	動ける
56	いどころね	おかしな
55	いと	うたたね
		くの内／くの間に

No.	方言	意味
112	かてる	仲間に入れる
111	すがてら	くながら
110	かっぱし	草を刈って干す
109	かたる	加わる
108	かすける	他人のせいにする
107	かしょう	貸してくれ
106	かじくる	蓄る
105	かじくりおてえた	力を落とした
104	がさばる	量が多い
103	がさ	量
102	かがみつつちよ	とかけ
101	ががあいう	がみがみ言う
100	かあばる	こびりつく
99	おんばく	ひきがえるの雌
98	おれんさん	自惚れが強い人
97	おれえて	降ろす
96	およそ	たいてい／多くの場合
95	おやす	こわす／痛める
94	おもっせ	大晦日
93	おひら	根菜類の料理
92	おてんたら	おせじ
91	おてえた	落した
90	おちんぶり	すねる
89	おぞい(おぜえ)	粗末／せこい
88	おしよろさん	精霊さま
87	おじやみ	お手玉
86	おしやんべり	よくしゃべる人
85	おさっさ	あわて者
84	おこんば	ままごと

No.	方言	意味
141	こそくる	修理する／繕う
140	こぜえる	小さく固まる
139	こずむ	沈殿する
138	こすい	けち／せこい
137	ここいらへん	この辺
136	こぐ	抜く
135	こく	言う
134	こきたわるい	腹が立って気分が悪い
133	こきたない	酷く汚い
132	こうしゃあゆう	講釈を言う
131	こ(あ)いたんふう	こ(あ)いうふう
130	くげない	不可能を表す言葉 例：やれげない
129	げす	堆肥
128	げえもねえ	価値もない
127	くれる	贈る側からあげるの意
126	くらすせる	なくつける
125	くらす・くれる	捨る／捨控する
124	くつつく	かみつく
123	くつく	苦労して
122	くせる	さえずる
121	くすがる・くすげる	刺す・突き刺さる
120	ぐしゃる	ぬかるむ
119	くしゃりつける	地面や床に投げつける
118	ぎんどう	けちな人
117	きれえに	すっかり／ずいぶん
116	きもをいらせる	からかう
115	きつさり	決断がよい
114	かんだりい	だるい
113	がらい	誤って

No.	方言	意味
170	しよしらんかお	知らないふりをする様
169	しじゃん	すですね
168	しやらし	非常に／とても
167	しゃばく	破く／引き裂く
166	しゃつたらにくい	いまいましい
165	しめぼつてやあ	湿っぽい
164	しなす	発育不良のもの(野菜など)
163	しなさんな	しないように
162	しとる	湿気る
161	したべら	舌
160	したつかあ	下側
159	しいしい	しながら
158	さんざ	充分に
157	さざら	くごと
156	さやあ	ました
155	ざっかけない	無造作
154	さざらほうざら	滅茶苦茶
153	さくる	耕す
152	さくい	気さく
151	さざあ	くしましよ
150	こんぼお	仔牛／小さい
149	こんなたに	こんなふうに
148	こんきゃあ(こんくりゃあ)	このくらい
147	ごろつちよ	ふくろう
146	これつばか	これだけ
145	こみんじり	充分
144	こまんざりゃあ	熊手
143	こば	端、隅、角
142	こてんくしゃん	こてんぱん

No.	方言	意味
199	せんびき	定規
198	せちがる	欲しがる
197	せせくる	いじくる／弄ぶ
196	せえて	添えて
195	せえう	言う
194	すらつとほける	しらをさる
193	すらつかい	嘘つき／忘ける
192	ずら	でしよう
191	すべくる	滑る
190	すびる	腫れがひく
189	すばかっちゃ	馬鹿者
188	ずない	気が強い／我が強い
187	すてくさつて	ふてくさつて
186	すつぼうい	おかずなしの食事
185	ずつなし(じちなし)	だらしない／ものぐさ／面倒くさがり
184	すつとばかす	飛ばす
183	すつちよない	無愛想
182	ずだやあ	てんで／全然
181	すこい	悪がしこい
180	ずく	熟柿
179	すがい	稲束をしばる縄
178	すいほろ	掘風呂
177	すいこき	酸薬
176	しらつくら	ばけつとする
175	しらざあ	しよう
174	しよろしよろ	のろのろ
173	じよる	切る
172	じよびらん	だらしなく着物を着ている様
171	しよつち	入口／始まり

No.	方言	意味
228	ちんぶりかく	すねる／ふくれつ面する
227	ちんびい	小さい
226	ちよれえ	とろい／まぬけ
225	ちよびちよび	出しゃばつて余計なことをする
224	ちよつくりしよ	少し／少しの間
223	ちよちよる	ふざける／戯れる
222	ちようらかす	かまう
221	ちようちよしい	大げさ／口数が多く騒がしい
220	ちようたれる	ふざける／戯れる
219	ちようきゅう	まとも／正しい
218	ちようちよ	丁度よく
217	ちやかまか	出しゃばつて余計なことをする
216	ちつとらつ	少しつ
215	ちつくない	小さい
214	ちそ	紫蘇
213	ちいつたあ	少しは
212	だれる	力がぬける
211	くだら	くでしよう
210	だもんで	だからさあ
209	だばける	ふざける
208	たこる	さぼる
207	だけんが	だけれども
206	たけぶんぼう	竹とんぼ
205	たあこと	たわけたこと
204	そんなたに	そんなに
203	そのいとに	そのうち
202	そうしらざあ	そうしましよ
201	そうじゃんか	そいうでしよ
200	そうさやあ	そうですよ

No.	方言	意味
257	のつくむ(くんのむ)	飲み込む
256	のす	木に登る/のす
255	ねふいてる	熟睡中
254	ねつちよう	ふてくされる
253	ねき	近く/傍
252	ねえま	苗田
251	ねえつた	眠った
250	にしい	新しい
249	なんぼでも	いくらでも
248	なんしよかんしよ	何でもかんでも
247	なんししよう	何にしろ
246	なにつか	色々な
245	なつたら	なつたでしょう
244	なぜくる	撫でる
243	なすっぱ	子どもの虫歯
242	なき	きり
241	なきんすら	良く泣く人
240	なあや	だねえ/ですね
239	とまぐち	玄関
238	とびくくら	かけっこ
237	とつくのどんま	とつくの音に
236	どうずら	どうでしょうか
235	どうずく	いじる/もてあそぶ
234	どういたに	どのように
233	てんだう	手伝う
232	でろ	泥
231	つつんぼ	竹筒
230	つつけんど	無愛想な対応
229	づだい	全く

No.	方言	意味
286	ぶつくらす	殴る
285	ふたつかめ	二重まぶた
284	ぶしよつたい	不潔っぽい/だらしない
283	ぶく	無効/破談
282	ふうたに	あのように
281	ひる	排泄する
280	ひやあ	もう
279	ひなる	悲鳴をあげる
278	ひどろしい	まぶしい
277	ひとつて	一人で/自然に
276	ひとつきら	ひととき
275	ひつぽかす	放り投げる/放置する
274	ひつさばる	放り投げる
273	ひきずり	始末をしない
272	ひがらもん	日数がかかること
271	ひがた	日向
270	ひいこらひいこら	やと/少しづつ
269	ばんたび	毎回/度々
268	ばんげ	晩餉
267	はやす	孵化させる
266	はっかけばあさん	彼岸花
265	はだつて	わざと
264	はだかる	遠慮なし
263	はす	嘴(口のこ)
262	はさみつちよ	くわがたむし
261	はぐしゃれる	ふざけまわる
260	くばか、くばつか	ばかり
259	はかあいかにやあ	はかどらない
258	のつつつ	ばさばさして喉につまる感じ

No.	方言	意味
315	めぐらまつたい	目まぐるしい
314	むる	漏る
313	むいから	麦稗
312	みんじり	充分
311	みるい	軟らかい/幼稚
310	みご	稲茎の芯
309	みがつら	見ながら
308	みがいる	熟す
307	まるかつて	大勢で/束になって
306	まめつたい	まめまめしい/勤勉
305	まみや	眉
304	ましょくにあわぬ	引き合わぬ
303	まかさる	巻き付く
302	ポンポン	原付バイク
301	ほんこ	本物
300	ぼっこ	ぼろ/ポンコツ
299	ほし	借金/付け
298	ぼさつかぶり	小さな草むら
297	ぼこつく	叱責する/怒鳴りつける
296	ほうげえもねえ	法外もない
295	へんぼらい	変わり者/へそ曲がり
294	へずる	上まえをとる
293	へしゃげる	ひしゃげる
292	へさえる	押さえる
291	ぶんぶう	こがね虫
290	ふんづぶす	踏んづける
289	ふんじやー	それでは
288	ふるふる	身震いする
287	ふつたて	風雲

No.	方言	意味
329	わんまあ	わがままな
328	よばる	呼びよせる
327	よじよう	食物にわがまま
326	やんでく	歩いて行く
325	やぶせつたい	うつつうしい
324	やつきりする	しゃくにさわる
323	やじかる	いやがる
322	やけつたり (やけつたら)	やけど
321	やくたやあもなやあ	無益/つまらない
320	やいやい	おやおや
319	くもしん	くしないだろう/くしなくせに
318	もしつけ	たき木
317	めためた	度々
316	めこんじき	ものもらい

表 3-4 富士宮市域の主要な方言一覧

## 第三節 富士宮の歌

「歌」の意味は広く、その種類も非常に多いが、ここでは地域の人々に伝承され、その生活に根付き、日常や晴れの場合で歌い継がれ、伝えられてきたものを扱う。

こうしたものの調査は昭和六一年（一九八六）、静岡県教育委員会が実施した民謡の実態調査をまとめた『静岡県の民謡』や平成八年（一九九六）静岡県教育委員会発行の『静岡県こころのうた』に富士宮市関連のものが数多く掲載されている。その後、平成一四年（二〇〇二）の富士宮市市制施行六〇周年記念事業として実施した「ふじのみやの歌」収集・保存事業において収集し、補遺・追加してきた。以下に富士宮市に残る民謡、富士山をめぐる愛唱歌を記し、新民謡や歌謡などは表にて紹介する（表3-5-7）。

なお、新民謡と言われる近代以降に創作された民謡については、佐野哲雄氏が資料収集・編さんを行っており、『富士宮の民謡』としてまとめた冊子を参考になっている。

### 富士宮の民謡

民謡とは、大衆の日常生活の中から、自然に生みだされ、育まれ、幾世代にもわたって口から口へと歌い継がれてきた歌謡の総称である。従って、それに包摂される歌謡は極めて数多く、また多種類に及んでいる。紹介する曲目は『静岡県の民謡』に取り上げられたものである。掲載の民謡の種類は、一、労作歌（①田植唄、②唐臼挽唄、③杣唄、④茶摘唄、⑤糸取唄、⑥木遣唄）、二、祭り・行事・祝歌（①七種粥の唄、②成木責めの唄）、三、祝福芸の歌（①子守歌）、四、遊戯歌（①わらべ唄）である。

### 一、労作歌

#### ① 田植唄

富士山本宮浅間大社（以下、浅間大社）の「御田植祭」は神社南にある神田において、七月七日（令和七年度より六月最終日曜日）に田植えを行い、五穀豊穰を祈る行事である（第三編第二章第四節）。この時早乙女役の少女の田植舞にともなう唄がこの歌である。御田植祭は、遅くとも天正年間（一五七三〜九二）には始まっていたと考えられ、明治維新後一時中絶したが、明治四年（一八七一）に復興した。

現在、田長の歌う「田植唄」と、昭和五年（一九三〇）から取り入れられた早乙女役の少女の田植舞にともない歌う「田植舞唄」が歌い継がれている。

田植唄 伝承者 宮町 朝比奈 孝

へこがいわざ田つくる道も久方の 天津御神ぞ始めたまえる  
 へこがいわざ田つくる道も久方の 天津御神ぞ始めたまえる  
 へあさまの太郎じはよい太郎じ うえ田の中でもよい太郎じ  
 郎じよい太郎じ  
 へあさまの乙女はよい乙女 乙女の中でもよい乙女よい乙女

田植舞唄

伝承者 浅間大社（田植え舞姫）

へわかたねうえうよ なえたねうえうよ  
 乙女の手にとりて 拾ひとるとよ  
 イザヤ イザヤ イザヤ イザヤ

へさみだれにみすそぬらしてうゆる田を  
君が千歳のみまくさにせん

へみまもしげや わかなえとる手やは  
白玉とる手こそ 白玉なゆらやとみくさの花  
へふくまんごくにほんごくへ うえちらし  
手に手をとりにて拾いとるとよ

御田植祭のほかにも市内において記録された田植唄を掲載する。いずれも昭和六一年（一九八六）静岡県教育委員会が実施した民謡の実態調査により採歌されたものである。

**田植唄** 伝承者 鳥並 山本はな

へヤレーみちばたの たけの子  
ヤレーつりざおに ヨーイトナー

**田植唄** 伝承者 鳥並 山本はな

へ今年参りてものよけりや  
また来年もござれ 田の神

**田植唄** 伝承者 大鹿窪 山本やすの

へヤレーサみちばたのたけのこ  
ヤレーサつりざおにヨーイトナ  
へヤレーサつりだいたつりだいた  
ヤレーサかつー千本つりだいた  
へヤレーサ尺のまな板でナー  
ヤレーサかじゃおろしのほう丁で

ヤレーサさらりさらりとおろそうな  
ヤレーサ酔ったヨ五勺の酒に  
ヤレーサ一合飲んだらゆらの助

**大家での田植え唄**

へヤレーサ今日は大家のおん田ゆえ  
ヤレーサおらちこらちのないうように  
ヤレーサ稲のかりであるように

②唐臼挽唄（穀物などを石臼で挽いて粉にする作業に歌われた）

**唐臼挽唄** 伝承者 半野 木村喜太郎

へ臼を挽きたいやり木の臼をよ  
かわい殿御のもとどりだよ  
へ臼を挽きやこそあなたのそばだよ  
うすがおえれば西東よ

③杣唄（木材を伐採する際に歌われた）

**杣唄** 伝承者 半野 木村喜太郎

へ色に持つなら木びきさんをおよし  
仲の良い木をひきわける  
へ色に持つならおけやさんを持ちな  
はなればなれを丸くする

④茶摘唄（茶畑で茶葉を摘む作業の際に歌われた）

茶摘み唄 伝承者 山本 望野丑太郎

へお茶の出場所はヨー 三国ヨー

ドーシタドーシタ

チヨイト一のヨー

オーヤレソーダヨー

富士の裾野のヨー

アールラスソノガドウスルエート

裾野の猪之頭

へ吹けよ川風ヨー まくれヨナ

ドーシタドーシタ

チヨイトのれんヨー

ヤレソーダヨー

奥の番頭さんの

エーヨイトヨイトヨイト

番頭さんの顔見たい

⑤糸取唄（煮た繭から糸を引く作業中に歌われた）

糸取唄 伝承者 上柚野 稲葉市郎

へわしら可愛チャンはここにゃいな

いなはずだよないじゃものよドッコイシヨ

へわしら可愛チャンに着せたいものは

おさせがすりにもちゃげじまよドッコイシヨ

へわしら可愛チャンは製糸場工女

糸をとりとりくだをまくよドッコイシヨ

⑥木遣唄

浅間大社の一月例大祭に神田地区の人たちによって、勇壮に奉納される木遣唄（第三編第三章第三節）。本来、「木遣」とは重い材木などを運ぶ際、息を合わせ、掛声を掛けて歌った歌であるが、この木遣りは神社を称える唄になっている。

大宮木遣り

伝承者 大宮木遣り保存会 富士宮神田区木遣り連

へ富士の白雪 ホヤソセ エーホーイヤンセ

朝日で溶ける ホヤソセ エーホーイヤンセ

溶けて流れて ホヤソセ エーホーイヤンセ

池の湧く玉 ホヤソセ エーホーイヤンセ

写す八玉の ホヤソセ エーホーイヤンセ

朱の御柱 ホヤソセ エーホーイヤンセ

千代に八千代に ホヤソセ エーホーイヤンセ

二、祭り・行事・祝歌

①七種粥の唄

七種粥の唄

伝承者 半野 木村喜太郎

伝承者 内房 望月ミツ子 鈴木なみよ

へななくさなずな

唐土の鳥と田舎の鳥と日本の橋を渡らぬ先に

合わせてパツタバタ

## ②成木責めの唄

成り木責め唄 伝承者 内房 鈴木なみよ

へ柿の木柿の木お祝い申す 成らすと申せ  
元からうらまで千百俵万百俵  
雨降っても落ちんな 風吹いても落ちんな  
遠なりするな 無駄花咲くな

成り木責め唄 伝承者 内房 森ひで

へ柿の木柿の木お祝い申す 成ると申せ  
成らないと切るぞ  
上から下まで千百俵万百俵 ダイノコーシヨウノコ  
おかたのおしりを お祝い申す

## 三、祝福芸の歌

### ①子守唄

芝川の子守唄 伝承者 佐野典子

へ一にゃ いじめられ 二にゃ 憎まられ  
三にゃ 酒屋へ酒を 買いやられ  
四には しめしまで洗わされて  
五には ゴンゴと泣く子をしよわせ(られ)  
六には ろくでもないことばかり言われ  
七には 質屋へ質受けられて  
八にゃ はつとばされて 九にゃ くだかれて  
十にゃ とうさん つとまりません  
親がないとて こばかにするな

## 四、遊戯歌

### ①手毬唄

親は地獄で 土山かぶり  
粟のにぎりめしよ ひつからめてひつちよつて  
裏の小道を ドッコイシヨと行けば  
かわいい母ちゃんの 石碑が見える  
せめてちようちよの 片羽あれば  
舞って行きたい 母ちゃんのそばへ  
飛んで行きたい 母ちゃんのそばへ

遊戯唄 伝承者 内房 鈴木竹治 望月ミツ子

へおん正正月は 松立てて竹たてて  
喜ぶ者はお子供衆  
いやがる者はお年寄 旦那の嫌いは大晦日  
一夜明くれば元日だ  
おたぼこぼんお茶持つてこい  
吸物なんぞは早持つてこい  
まずまず一かん貫せました

草履きんじょ(履物かくし) 伝承 芝川地区

草履きんじょ きんじょ  
おてんま てんま  
みようみよう車に 手をとってみれば  
さぶろく しどろく じゅうさぶくろよ  
ぬけたの セッセのセ

## 五、富士山をめぐる愛唱歌

最後に富士宮市のみならず、広く歌われてきた富士山をめぐる愛唱歌を以下に紹介する。

### ふじの山 作詞 巖谷小波 作曲 不詳

- 一、あたまを雲の上になだし  
四方の山を見おろして  
かみなりさまを下にきく  
ふじは日本一の山
- 二、青ぞら高くそびえ立ち  
からだに雪の着物着て  
かすみのすそを 遠くひく  
ふじは日本一の山

※「ふじの山」は、明治四三年（一九一〇）七月、文部省唱歌として制定され『尋常小学校読本唱歌』第四巻に掲載された。以後、国民的愛唱歌となった。

### 白糸の滝 作詞 不詳 作曲 不詳

- 一、富士のたかねの 白雪とけて  
地下をくぐりて 断崖高く  
水はおつるよ 千すじに分れ  
すたれかけたる 滝の白糸
- 二、青葉若葉の 夏なおさむく  
金糸銀糸に おりなすにしき  
滝のしぶきは 七色にじに  
ひかりかがやく 滝の白糸

## 富士宮市に残る民謡など

番号	タイトル	伝承地	演唱(奏)者など
1	唐臼挽き唄	半 野	木村喜太郎
2	杣唄	半 野	木村喜太郎
3	茶摘み唄	山 本	望野丑太郎
4	一人きな二人きな	半 野	木村喜太郎
5	ナナクサギヤーの唄	半 野 内 房	木村喜太郎 望月ミツ子、鈴木なみよ
6	田植唄	宮 町	朝比奈孝
7	田植舞唄	大宮町	富士山本宮浅間大社
8	大宮木遣り	大 宮	小長井英雄
9	田植唄	鳥 並	山本はな
10	田植唄	鳥 並	山本はな
11	田植唄	大鹿窪	山本やすの
12	糸取唄	上柚野	稲葉市郎
13	長持唄	上柚野	稲葉市郎
14	長持唄	大鹿窪	山本やすの
15	七種粥の唄	半 野 内 房	木村喜太郎 望月ミツ子、鈴木なみよ
16	成り木責め唄	半 野	木村喜太郎
17	成り木責め唄	内 房	鈴木なみよ
18	成り木責め唄	内 房	森 ひで
19	芝川の子守唄	芝川地区	佐野典子
20	遊戯唄	内 房	鈴木竹治、望月ミツ子
21	草履きんじょ	芝川地区	

表 3-5 富士宮市に残る民謡など  
『静岡県の民謡』を元に作成。

三、神のみわざか み山の精か  
けふる滝つせ 雲よびかわし  
ひびきとうとう 日も夜もたえず  
みだれおつるよ 滝の白糸

※「白糸の滝」は、全二八曲からなる『静岡県郷土唱歌』（静岡県教育委員会 一九三六）に選定されたものである。富士山と共に当時から県内有数の景勝地と捉えられていた。

## 富士山をめぐる愛唱歌

番号	タイトル	作 詞	作 曲	歌	制作年月日
1	白糸の滝				昭和3年11月
2	富士の裾野				昭和9年5月
3	富士川下り				昭和9年5月
4	富士登山				昭和9年11月
5	富士之詠	万葉集 山部赤人	藤井凡大		
6	富士登山			井出越子	昭和11年3月18日
7	富士登山唱歌	赤池常作	内藤俊二		明治42年7月
8	富士山讃歌	アベ・イチロー	杉本憲一		平成20年2月
9	ふじ山ソング	佐野嵐士	元宗男	富士宮少年少女合唱団	平成16年出版
10	ふじの山	巖谷小波	不詳		明治43年
11	富士山 2009	新井満	新井満	三波春夫 / 新井満 / 森進一	平成元年
12	富士山	かず翼	久保崎真也	藤野ひろ子	平成24年

表 3-6 富士山をめぐる愛唱歌

## 新民謡や歌謡曲

番号	曲 名	作 詞	作 曲	唄	制作年月日
1	富士大宮音頭	勝田香月	杉山長谷夫		昭和7年
2	大宮小唄	村松呉山人	片岡志行		昭和3年
3	大宮音頭	加藤省吾	佐上たかし		昭和9年
4	富士大宮	松村呉山人	片岡志行		昭和9年
5	曾我節	野口雨情	藤井清水		昭和3年
6	富士宮音頭	藤浦 洸	上原げんと		昭和42年
7	富士宮小唄	藤浦 洸	上原げんと		昭和42年
8	富士山御神火音頭	柳沢和彦	渡辺顕雄	里見浩太郎	昭和48年
9	白糸音頭	伊藤 久	伊藤 久		昭和22年
10	上井出音頭	勝田香月	大村 能章		昭和26年
11	青木音頭	本多政四郎	遠藤ヒデ子		昭和60年
12	神立音頭	野沢たけし	由良一夫		平成4年
13	羽衣湧水音頭	高岡君子	高岡利光		平成10年
14	羽衣平成よいさ節	遠藤鐵雄	遠藤鐵雄		平成10年
15	花の静岡百年音頭	駿河きよし (元歌作詞：榎雄一郎)	市川昭介		
16	おらが表富士	富士宮民謡会	市川昭介		
17	富士根音頭	戸枝 弘	大石進一		昭和26年
18	三園平音頭	島田喜弘	遠藤邦男		
19	龍神子守唄	島田喜弘	遠藤邦男		
20	焼きそば音頭	佐野二三江	佐野二三江		
21	富士宮ブルース	真山幸二	河合英郎		
22	富士宮そだち	伊藤 薫	伊藤 薫		
23	田貫湖讃歌(私の田貫湖)	長谷川胡風	遠藤みち子		
24	宮おどり		水越加寿彦		平成4年
25	霊峰富士よふるさとよ(夫婦旅路)	井出天駿	桑原研郎		
26	ふるさと祭りばやし	いでいさお	中島昭二		
27	白糸夜曲	いでいさお	富田 千		
28	峰山慕情	いでいさお	山田成治		
29	ふるさと賛歌	いでいさお	中島昭二		
30	駒止の桜	好月 あい	元 宗男		

番号	曲名	作詞	作曲	唄	制作年月日
31	ガジュマル	好月 あい	元 宗男		
32	陣馬の滝音頭	内藤重吉	原田有唱		
33	陣馬の滝哀歌 (エルゾー)	内藤重吉	野島佳能		
34	宮祭りだよ	佐野二三江	佐野二三江		
35	大中里祭り	元 宗男 (補作詞 渡辺昭子)	元 宗男		
36	ふじ山ソング	佐野嵐士	元 宗男		
37	思えば千と二百年	後藤良夫	後藤良夫	渡辺通久	平成 17 年
38	やきそば娘	C R E S C	C R E S C		
39	白糸エレジー	渡辺文雄	渡辺文雄		
40	淡い初恋	渡辺文雄	渡辺文雄		
41	JA 富士宮食農音頭				
42	富士宮秋祭り唄	小塚敏治	江口浩司	藤野ひろ子	平成 4 年
43	瑞穂音頭				
44	大宮町復興祭の唄				昭和 9 年
45	富士宮の小唄 (富士大宮、新富士宮音頭、 茶つきり節、新富士宮小唄、富士宮ブルース、 曾我節、富士大宮音頭)				
46	親ごころ、秋田・雪蛭、男のみれん			春奈輝昭	
47	歌集 (大宮音頭、大宮小唄、富士大宮 音頭、曾我節、富士大宮)				
48	ふじのみやの民謡 (富士宮音頭、曾我 節、富士大宮、富士宮小唄)				
49	富士を訪ね	間藤方利	馬上雅宏		
50	屋台物語	間藤方利	馬上雅宏		
51	五郎時到	岩佐多歌子	市川昭介	村松勢心	
52	函館の啄木	石川啄木 大野恵造	土田岳心	村松勢心	
53	富士幻想	みずのしんじ	石川まさゆき	愛川京子	
54	かぐや姫幻想	みずのしんじ	石川まさゆき	愛川京子	
55	短歌 田子の浦ゆ		藤井凡大		
56	走れ宮バス	高野裕章	高野裕章		平成 21 年
57	らしさが響きあう街「ふじのみや」	村瀬きょうこ	村瀬きょうこ		平成 21 年
58	この花さくや姫	恵羅	三上範子		平成 21 年
59	宮タク☆サンバ	高野裕章	高野裕章		平成 22 年
60	きらめく夏				
61	夏の宝物				
62	稲子川小唄	後藤良夫	高岡利光	後藤良夫	平成 3 年
63	稲子川恋歌	後藤良夫	後藤良夫	後藤良夫	平成 4 年
64	私の故郷芝川町	後藤良夫	後藤良夫	後藤良夫	平成 4 年
65	富士を撮る	後藤良夫	後藤良夫	後藤良夫	平成 5 年
66	稲子音頭	後藤良夫	後藤良夫	後藤良夫	平成 7 年
67	芝川おどり	後藤良夫	後藤良夫	高岡利光	平成 12 年
68	思い出の西山本門寺	後藤良夫	高岡利光	後藤良夫	平成 13 年
69	新富士宮ブルース	後藤良夫	後藤良夫	赤池タイ	平成 19 年
70	狩宿物語	後藤良夫	後藤良夫	渡邊多恵子	平成 20 年
71	芭蕉天神宮 (てんじん) 音頭	内山和樹	内山和樹	吉法師太吉	
72	愛しき町芝川	内山和樹	内山和樹	内山和樹	平成 13 年
73	あゝ身延線	竹内秀秋	望月吾郎/南雲一広	望月吾郎	
74	美守の都		宮野 寛子		令和元年
75	富士山	かず 翼	久保崎 真也	藤野 ひろ子	平成 24 年
76	富士根囃子	稲穂雅己・島田馨也 (補作 長谷川公子)	長津義司	石川静男・石川貴子	昭和 26 年 令和 3 年再編

表 3-7 新民謡や歌謡曲